

# 人としてのやさしさがないと あんなすばらしいソフトは つくれません



尾内さんは、「カミオカンデ」がある神岡（飛騨市）で粉末冶金の工場経営をされている。早い時期から電算機やコンピュータが趣味だった尾内さんはあるソフトに出会い、人生に新たな1ページを加えることになる。ソフトの名は「ファラオ」。ヴァル研究所創業者の島村隆雄さんが開発したパソコン用データ処理ソフトである。「やさしさがないとあんなソフトはつくれない」と尾内さんはいう。残念ながら開発者の島村さんは20年前に55歳で早逝されたが、そのイズムは尾内さんのなかに生き続けている。

（本紙主幹・奥田喜久男）

## 尾内治良

Haruyoshi Ouchi

和佐保加工  
代表取締役会長

### 専務に直訴して 「ぱびろじすと」に入会

奥田 「カミオカンデ」見学の際には大変お世話になりました。

尾内 こちらこそ遠いところまでおいでいただき、ありがとうございました。

奥田 今日は尾内さんのことと「ぱびろじすと」のことをうかがわせていただければと思っています。一応おさらいしますと、「ぱびろじすと」というのはヴァル研究所の創業者である島村隆雄氏を中心となって開発したソフト「ファラオ」と「ナイル」のユーザーが自発的に集まって始められた技術交流組織ですね。

尾内 私はファラオを使って感動して、「ぱびろじ

すと」に加えていただきました。

奥田 ファラオとの出会いを覚えていらっしゃいますか。

尾内 当時NECの98を使っていて、何かの雑誌でファラオの広告を見たんですが「これはすごい！」と。直感みたいなものです。

奥田 それで買われたわけですか。

尾内 当時は近くにお店がなくて直接ヴァル研さ



**PROFILE** 1940年岐阜県吉城郡神岡町(現・飛騨市)生まれ。73年和佐保加工設立。一貫して粉末冶金製品の精密加工を行う。父方のいとこ岡崎嘉春氏(元・富士通エフサス)の影響を受けて中学生の頃からコンピュータに興味をもつ。90年NEC98ユーザー時代にパソコン用データ処理ソフト「ファラオ」(ヴァル研究所)に出会い「ばびろじすと」メンバーに。趣味の写真はギャラリーでの写真展開催、写真集『奥飛騨源流』(共著・田家幸平 2003年岐阜新聞社)出版の腕前。14年富山市に発足したハイエンドデジタルカメラユーザーのための「富山電塾」にも携わり運営委員を務める。

構成・文 / 浅井美江  
text by Mie Asai

撮影 / 松嶋優子  
photo by Yuko Matsushima

2017.8.16 / BCN 22世紀アカデミールームにて

んに注文したんだっただけかな。とにかく入手して使ってみたら、それがもうおもしろくて……。

奥田 すぐに動かせましたか。

尾内 何の問題もなく。もう、ほんとにおもしろくて、なんとすばらしい道具なんだと感動しまして、「ばびろじすと」の全国大会があると聞いたのでさっそく参加したんです。

奥田 すごい行動力ですね。ちょっとゆっくり当時のことを教えていただけますか(笑)。ファラオの何に感動されたんでしょう。

尾内 一番感じたのは、仕事がわかっている人がやりたいと思うことをちゃんと形にできるツールだということです。

奥田 “仕事がわかっている”というのは、経営者としての仕事ということですね。

尾内 そうです。仕事がわかっている自分がこうしたいと思っていることがあれば、ファラオはそれを実現してくれる。実はそれまでにもベーシックにトライしたことがあったんですが、どうも面倒だなと感じていました。

奥田 それがファラオだと簡単だった。

尾内 こうしたいと思っていることを順々に入れていけばできたんです。

奥田 何か月くらいで業務に使えるようになったんですか。

尾内 ファラオの持つ機能がすばらしいですから、そんなにかかりませんでした。

奥田 それで感動されて大会に出てみようと思われた。

尾内 大会があることを知って、「ばびろじすと」の仲間に入れていただくとしたんです。ところが、紹介者がいないと入会できないという時代だったんです。紹介者はいない、でもどうしても入りたい。それで主催されていたヴァル研究所の専務(山田靖二さん)の方に直訴しました。

奥田 なんと積極的な(笑)。

尾内 紹介者がいないので、専務さんに保証してくださいとお願いしたら「わかりました。いいですよ」と。

奥田 すごいですねえ。尾内さんのパワーに圧倒

されたんでしょうね。

尾内 そうかもしれません。それでメンバーに入れていただいて、島村社長にもお会いすることができて。

奥田 楽しい時代でしたね。

## ファラオに出会って 一気に業務がパソコンにシフト

奥田 尾内さんがコンピュータに出会われたのはいつですか。

尾内 自分で最初に買ったのは、カシオの電算機です。いやいや小数点のない電卓です。

奥田 なんのために買われたのですか。

尾内 趣味ですね。何をしたという覚えはないですねえ。

奥田 高かったでしょ(笑)。

尾内 でもそういうものが好きだったんです。

奥田 好きになるきっかけがあったんですか。

尾内 中学生くらいの時でしたかね。父のいとこにあたる人が東京の大学を卒業して、今でいうベンチャーで真空管のコンピュータをつくり始めたんです。

奥田 尾内さんが中学ということは1950年代ですよ。それは早いなあ。その方のお名前は？

尾内 岡崎嘉春といいます。ベンチャーで立ち上げた後、富士通に吸収されて、その後はずっと富士通系列の会社にいました。

奥田 え？ 岡崎嘉春さんですか。コンピュータの歴史に名前が出てこられる方ですよ。直接会っておられたんですか。

尾内 そうです。帰郷するとしょっちゅう家にも泊まりに来ていて、いろんな話をしてくれるわけです。今思えばハードディスクのことなんだろうが、「IBMのマシンをバラしたら何やら穴が空いてる。なんだこれはとずっと考えたら、スムーズに回転するための穴だった。その穴がないと回転が安定しないんだ」とか。その少し後には「今はゆらぎの世界を研究しているよ」など。おもしろい世界だなと思いました。

奥田 それは大きな影響でしたね。最初の電算機を買われたその後は？

尾内 どのだったかな。

奥田 当時だと、タンディ・ラジオシャック、コモドール、アップル……。沖電気も出していましたね。

尾内 多分沖電気だったと思います。記憶メディアがなくてテープレコーダーの小さなカセットを記憶媒体にしてみましたね。

奥田 それは仕事で買われたんですか。

尾内 いや、趣味です。

奥田 尾内さん、ずいぶん投資してますねえ。奥さんに怒られませんでしたか。

尾内 大丈夫でした(笑)。

奥田 その頃、神岡にパソコンショップはあったんですか。

尾内 ないです。パソコン関連の本をみつけるのも大変でした。

奥田 となるとパソコンやパーツはどこで買われるんですか。

尾内 富山に1軒だけ先進的なお店がありましてね。パーツは高山に1軒あったかな。

奥田 富山に買い物に出られるんですか。

尾内 神岡の行政区は岐阜県ですが経済圏としては北陸ですから。でも富山にもそんな多くは置いていませんでしたから、東京にもよく通いました。

奥田 なるほど。最初は趣味だったのがだんだん仕事にシフトされていって。

尾内 業務用ソフトが出始めた頃でいろいろ買って試していました。ベーシックを組んでみたのもその頃ですね。そしてファラオに出会って一気に業務の一般管理や経理に使うようになりました。

(つづく)

BCNは「ものづくりの環」を支え  
育むメディア企業です



——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます  
ものを売る人がいます  
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます  
その意(おもい)が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人——  
私たちは「ものづくりの環」のなかで  
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

<http://www.bcn.co.jp/>

※この記事は、近く週刊BCN+の「千人回峰 人ありて我あり」で公開する予定です。  
<https://www.weeklybcn.com/journal/hitoarite/>



### 自家製特殊雲台と 愛用のカメラ 「シグマSDQ」

「レンズのノーダルポイントと、可動XYZ軸を一致させる特殊雲台で、一つの被写体を縦5段、横6列、都合30枚位で撮影して、現像の段階でステッチングし、超高画質写真を作るための道具です」と尾内さん。